＜非政治的人間＞の政治遍歴

——1920年前後のトーマス・マンをめぐって——

友　田　和　秀

本稿は1920年前後，つまり第一次大戦終結からいわゆる＜転向＞にいたるあいだの，トーマス・マンにおける保守思想の一断面をめぐる考察である。その一断面に照明をあてることによって，マンの保守主義が第一次大戦後どのような方向に進み，＜転向＞直前にはいかなる相貌を呈していたのかということに，すなわちヴァイマル共和国支持にいたるまでのマンの保守主義の内実にせまる手掛かりとしたい。それは同時に＜転向＞問題を考えるにあたって欠くことのできない前提のひとつであるとともに，第一次大戦後のアクチュアルな思想潮流のなかにしめるマンの思想的・政治的位置を精確に定位するための準備作業でもある。

I

ことのはじまりを思い出してみよう！——あのけっして忘れることのできない最初の日々を，もはやおこるとは思われなかったあの大いなるものが突然やって来た日々を！わたしたちは戦争があるとは思っていなかった。わたしたちはヨーロッパの破局の必然性を認識するのに十分な政治的洞察力を持ち合わせてはいなかったのだ。しかし倫理的なものとして——そう，そのようなものとしてわたしたちは試練がやって来るのを知っていた，いやそれどころかなんらかのかたちで待ちこがれていたのだ。わたし

たちは心の奥底で感じていたのだった。この世界，わたしたちの世界はこのままではもう先へは進めないということを。(…) この世界には，うじ虫のような精神の毒虫どもがうごめいてはいなかったろうか。文明がつくり出した分解要素によってわきたち，悪臭をはなってはいなかったろうか。(…) 戦争！わたしたちが感じたのは浄化であり解放であった。とほうもない希望であった。詩人たちが語ったのはこのことについてであった。このことについてだけであった。(XIII. 531ff.)

1914年8月1日，第一次大戦勃発時にマンをおそった熱狂である。こう感じたのはマンひとりではなかった。これは，開戦当時大多数のドイツ人が共有した感情であった。[1] 偉大なる一瞬の感情，大いなる一体感，腐りきった戦前の世界からの「浄化，解放」，マンが多くの同時代人とともに新しいドイツの幕開けとして戦争のなかに読み取ったものを，当時のことばをもちいて＜1914年の理念＞と呼ぶことにしよう。[2]

短期決戦―ドイツの勝利におわり，浄化と解放をもたらしてくれるはずであった戦争は，しかしながら四年のながきにわたって戦われることになる。周知のようにマンはこの間，兄ハインリヒのゾラ論によって『非政治的人間の考察』(以下『考察』と略す) という「武器をもっての思想勤務」(XII. 9) に駆り出され，徹底的な自己探求ならびに自己検証を余儀なくされた結果，十九世紀的保守主義者としてのおのれの立場を確認したうえで，本質的に非政治的でロマン主義的なドイツ文化を基底に持つドイツ性が政治化されることを阻止すべく，高度に政治的な＜文明の文学者＞にたいして＜ガレー船の苦役＞に比すべきはげしい論争をおこなうはめに陥る。

『考察』が刊行されたのは1918年10月のことであった。それからひと月もたたぬ11月8日バイエルンで，翌9日ベルリーンで共和国が宣せられ，11月11日，ドイツはついに休戦条約に調印，ドイツの敗戦をもって第一次大戦は幕をおろすにいたる。敗戦，革命という時代の激震，日々流動化してゆく状況のなかにあって，『考察』のなかで取りあげられたさまざまなテーマおよび対立図

式はある面で急速にアクチュアリティーを失ってゆき，その結果自己検証の書でもある『考察』刊行直後にまたしてもマンはおのれの思想的・社会的・政治的立場の再検討をいやおうなくせまられることになる。1918年9月から1921年12月までの日記が1979年に公表されてから，激動する時代のただなかに立たされたマンの姿がわれわれの目にも明らかなものとなってきた。比較的はやい時期にこの日記について論じたE・ヘフトリヒは，「政治的に途方にくれた」という見出しのもとに政治的な分野におけるマンの「途方にくれた」様子を日記のなかに跡づけている。[3] 激烈な調子でデモクラシーを攻撃し，その真意はどうであれ「わたしは君主制をのぞむ」(XII. 261) とうそぶいてみせた『考察』の著者マンなのであった。デモクラシーがドイツに勝利し，ほかならぬ＜文明の文学者＞を中心とする政権を，さらにアイスナー暗殺後第二革命から第三革命へとマンの住むバイエルンにおいて政権が急速にラディカル化し，はては白軍と赤軍の内戦にいたる事態を目のあたりにして，途方にくれるなというほうが無理な話だろう。しかしながらこの事実をもって1920年前後のマンが「政治的に途方にくれ」ていたと断ずることはできない。日記の期間全般にわたって政治的な面におけるマンの態度はたしかに揺れを見せている。しかし日記を，いや日記だけでなくこの時期のマンの公的ならびに私的発言をも合わせて注意ぶかく読むならば，マンの態度は揺れをくりかえしながらしだいに一定の方向に定まってゆくのがわかるだろう。しかもそれは，同時代のさまざまな思想潮流とのせめぎ合いのなかから，一定のドイツ像をさし示しはじめるだろう。

> わたしは，できあがりつつあるように思える大ドイツ的，社会的共和国ドイツにたいして，まったくもって宥和的かつ肯定的な気持でいる。それはなにか新しいもの，ドイツ的な線に乗ったものだ。敗戦における肯定的な点は，ドイツが明らかにこの敗戦によって政治的発展の頂点に達するということだ。つまり社会的共和国は西欧のブルジョワ共和国ならびに金権政治を大きく超えるなにものかなのだ。フランスははじめて，政治的にドイ

ツのあとを追わねばならないだろう。[4)]

革命発生直後，1918年11月12日の日記の記述である。おのれの目に形成されつつあるように映る「社会的共和国」にたいしてマンはきわめて高い評価を下しているが，その評価の理由，さらにはかれが革命にたいしてみとめていた意義は，うえの引用から容易に見て取れるだろう。マンにとって「社会的共和国」は，それが「なにか新しいもの」であり，「西欧のブルジョワ共和国ならびに金権政治」を凌駕するものであるがゆえに価値あるものなのである。ドイツはたしかに戦争に敗れた。しかしドイツは敗戦がもたらした革命によって新たなものへ，しかも政治的にはじめてフランスを凌ぐ新たなものへ生まれ変わる可能性を手に入れたのである。これが，マンが革命のうちにみとめていた意義だといえる。日記のことばの背後には『考察』以来の反西欧的感情が濃厚にあらわれている。しかしそれと同時に，フランス革命にたいするものとして11月革命を捉えようとする視点，第一次大戦とともに1789年に権力を手にしたブルジョワ時代はおわりを告げようとしているのであり，勝利ゆえにブルジョワ時代およびその理念にふみとどまらざるをえない協商国にたいして，ドイツは11月革命によってフランス革命を超克し，世界史の新たな段階に足を踏み入れようとしているのだという認識をも読み取ることができる。[5)] それを裏づけるかのようにマンは翌11月13日，戦争が1916年に「協調による平和」などでおわっていたなら，「すべてはほとんど古い世界のままであっただろう。すべてを成就するには，ものごとは最後までなされねばならなかったのだ」ということばを日記にしるしている。[6)] 「わたしは君主制をのぞむ」とマンはたしかに公言した。しかしそれはリベラリズムやデモクラシーなどよりも君主制のほうがまだましだという主旨だったのである。状況が一変し，ドイツが革命によって新たに生まれ変わる可能性を得たいま，マンの目は古い世界にのみ向けられてはいない。かれはけっして王政復古主義者ではないのである。これからのマンの歩みは，ロマン主義的ドイツ性をひたすら擁護した『考察』のばあいとは異なり，新たなものを求める方向に，前方に向けられることになる。

しかし現実はマンがのぞむようには推移しなかった。革命政府はもともとアイスナーを筆頭に＜文明の文学者＞的人物が中心になってつくりあげたようなものだから当然といえば当然のことなのだが，マンははやくも革命からひと月たらずのうちにアイスナー政権にたいするふかい失望感を日記にしるすことになる。[7] 現実の革命政府にコミットできない以上，かれはおのずとべつのところに道を求めてゆかざるをえない。

1917年にミュンヒェンで創刊され，ハインリヒ・フォン・グライヒェンとハインリヒ・ミヒャルスキーが編集にあたっていた『ヨーロッパ新聞』という新聞が革命後も出されていた。日記の注釈によるとこの新聞についてのくわしいことはわからないらしいが，[8] 革命直後の時期にマンがこの新聞から大きな影響を受けていたことは日記の記述から窺い知ることができる。たとえば1918年11月29日，マンはつぎのようにしるしている。

> ふたたびヨーロッパ新聞が二部つづけてやって来た。これは政治的な面でじっさいのところほんとうに大いに好感の持てる新聞だ。社会主義の，それどころかコミュニズムの理念が，理念としては未来のものであるということには疑問の余地はない――それとは逆に，古い，西欧によって代表されるデモクラシーにはもはやまちがいなく未来はない。ドイツは外にたいしてもまた内にたいしても，この新しい理念を十分にわが物としてゆかねばならないだろう。[9]（引用内傍点，原文イタリック，以下おなじ。）

『ヨーロッパ新聞』を媒介としてマンは，西欧のデモクラシーにはもはや未来がないということ，それにたいして「社会主義」，「コミュニズム」の理念は未来を内包しており，ドイツはこの理念を獲得すべく努めねばならないということを認識するのである。

1918年12月3日，『ヨーロッパ新聞』にあるミヒャルスキーの論説を引用したあと，マンは注目すべきことばを日記にしるす。

じっさい，ボルシェヴィズムと西欧金権政治とのあいだに，「政治的になにか新しいものをつくり出す」というのはドイツの課題だ。[10]

マンにとって西欧のブルジョワ政治はもはや未来のないものであった。しかしながら同時に，裕福な市民であり，なによりも秩序と品位を重んずるかれはボルシェヴィズムやプロレタリア独裁にたいしては嫌悪感のみならず恐怖感をも抱いていた。[11] したがってマンののぞむドイツはどちらの体制にコミットすることも許されない。一方，『考察』のなかで再三述べられているように，東と西のまんなかに位置するドイツ，中間の国ドイツというのはマンのドイツ観の根幹をなすものであった。[12] さらにかれはさきに見たように社会主義あるいはコミュニズムの理念は未来を内包するという認識を得ていた。いま『ヨーロッパ新聞』の論説に触発されて，『考察』におけるドイツ像を新たな次元に向けて変容させる可能性が開かれたのである。つまり革命を契機として王政復古ではなくドイツの蘇生をのぞむマンは，『考察』における十九世紀的ドイツをかれが考える社会主義の理念を基軸として，「ボルシェヴィズムと西欧金権政治とのあいだ」，地理的にいうなら東と西のあいだに位置する「政治的になにか新しいもの」，すなわち新たなドイツに向けて再生させるという明確な指針を獲得したのである。マンは今後紆余曲折を経ながらも基本的にはこの方向に向かってかれなりのドイツ像を摸索することになる。それは，アイスナー政権にたいするふかい失望感からもわかるように，現実の共和国を超えたところに新たなドイツを求める試みになるだろう。

基本路線は定まった。しかし状況のほうは1919年2月21日のアイスナー暗殺，それにともなう第二革命，さらには4月7日のバイエルン・レーテ共和国宣言による第三革命，赤軍と白軍による内戦へとますます混迷の度をふかめてゆく。5月2日の政府軍によるミュンヒェン奪取にいたるこの二ケ月あまりのあいだがマンの動揺のもっともはげしかった時期といえるが，この混乱期における重要な点は，マンが一時的であるにせよコミュニズムに熱狂したこと，ハインリヒ・フォン・アイケンの『中世世界観の歴史と体系』をつうじてコミュニ

ズムと中世キリスト教社会との共通点を見出したこと，そして四年間中断していた『魔の山』の執筆を再開したこと，この三点だろう。

コミュニズムにたいする熱狂にかんしては，新聞に報道されたイタリアとハンガリーにおけるボルシェヴィズムの伸展を「神に見捨てられた協商国政治の結果」と見做したうえで，ローベルト・フリートレンダーの『ドイツの労働デモクラシー』に影響を受けて，「スパルタキズム，コミュニズム，ボルシェヴィズムに見られる健康で人間的なもの，ナショナルで反協商的，反政治的なものにたいするわたしの関心は大きくなりつつある」と1919年3月22日の日記にしるしている。[13] マンがここで現実の政治形態としてのコミュニズムやボルシェヴィズムに賛同を示しているのかどうかわからないし，またそれらに見られる「健康で人間的なもの」とは具体的にどういうものなのか，あるいはそもそもスパルタキズムやコミュニズムが「反政治的」たりうるのかどうか不明である。それはともかく，二日後の3月24日，ハンガリーにおけるソヴィエト共和国の宣言，ウィーン，イタリアにおいてコミュニズムがさらなる広がりを見せているという記事に接したマンは，「雄弁家ブルジョワにたいする蜂起だ！(…) 新たなる1914年8月1日だ。「西側の嘘つきデモクラシーをたおせ！ドイツとロシアばんざい！コミュニズムばんざい！」とわたしは通りに走り出て叫びかねない」[14] と日記にしるし，かれのコミュニズムにたいする熱狂は頂点に達する。この興奮の背後には，ヨーロッパにおいてコミュニズムが拡大しているという報道がある。マンにとっては，ハンガリー，オーストリア，イタリアがドイツとともにコミュニズム化するならば，そこにロシアをも含めた広大かつ強大な勢力，反協商連合ができあがり，デモクラシーをあいかわらず奉じている協商国，とくにフランスにたいして決定的に優位に立ちうる可能性が開けてくるのである。それがマンをして「コミュニズムばんざい！」と叫ばしめたといえるが，しかし問題なのはこのような興奮状態，協商国にたいする憎しみの爆発が醒めやったのちのことだろう。

白軍がレーテ政府を攻撃し，ホフマン政府の復権を宣言した1919年4月13日，マンはこの事態を歓迎すると日記に記したあと，「しかし理論と実践のあ

いだには大きなへだたりがある。わたしは精神を危機にさらしたあの無責任な実行者たちを憎む」とつづける。[15] コミュニズムはマンにとって西欧デモクラシーに対抗しうる原理であるとともにそれ自体理念としては未来を内包しており，ドイツの将来をたくしうる魅力を持つ。しかしながら十分な配慮なしにひとたび実践に移されるや，それは無責任，無秩序，無軌道なものと化してしまい，「文化的破局」[16] 以外のなにものでもなくなってしまう。マンの目に無責任きわまりない輩と映るプロレタリアに政権をゆだねることなく，未来のものである社会主義あるいはコミュニズムの理念を市民的秩序のうえに立って実践すること，あるいは政府軍がミュンヒェンを奪取した5月2日の日記にあることばを借りるなら，「古い世界を保持したまま新たな，より倫理的な世界に移行」[17] すること，一連の動乱のなかからマンが学んだのはおそらくこういうことだろう。コミュニズムにたいする熱狂によって一時ボルシェヴィズムのほうに大きく傾いていたマンの態度は，ここにふたたび「ボルシェヴィズムと西欧金権政治のあいだ」にもどり，「健康で人間的なもの，ナショナルで反協商的，反政治的なもの」——このような特性はむろんコミュニズムにのみ固有のものではない——にもとづく新たなドイツを求めてゆくことになる。

コミュニズムにたいする共鳴，その背後にあるブルジョワ的・資本主義的時代はおわりを告げたという感情と根底において結び合いつつ，アイケンの著作によってマンはこの時期，コミュニズムと中世キリスト教社会との共通点を見出す。H・ヴィスキルヒェンはこの＜中世的コミュニズム＞をマンのコミュニズム観にとって決定的なものであったと捉え，マンの日記，アイケンの著作，さらに『魔の山』におけるナフタの言説を詳細に比較検討して，マンにとっての＜中世的コミュニズム＞の分析をおこなっている。[18] たしかにこの時期マンが＜中世的コミュニズム＞にドイツの将来を見ていたということは否定できないし，またそのような考えがかれの歴史観に一定の影響をおよぼしもしたであろう。しかし次章で見るようにマンの関心は1920年以降社会が比較的安定するにつれてコミュニズムから社会主義へ移ってゆくように思われる。＜中世的コミュニズム＞の問題，とくにヴィスキルヒェンの論考にかんしては，のちに当時

の思想潮流との関係で考えるとして，この章をしめくくるにあたってマンが『魔の山』執筆再開を決意した1919年4月17日の日記に着目してみたい。

それはつぎのようなものである。

> そのあいだに『魔の山』のことを考える。いまはじめてこの小説にふたたび着手するときがほんとうにやって来たのだ。戦時中でははやすぎた。わたしは断念しなければならなかった。戦争が革命のはじまりであったことがまず明らかにならねばならなかったのだ。戦争が終結するだけでなく，それが見せかけの終結であることが認識されねばならなかったのだ。[19]

問題は後半部分である。「戦争が革命のはじまりであった」とマンはいう。マンは，かれにとってドイツが新しく生まれ変わる契機であった「革命」のはじまりを1918年11月ではなく，1914年8月1日に置くのである。1914年8月1日，それはドイツの「浄化，解放」を約束する日であった。するとマンのいう「革命」は，<1914年の理念>に根本的に動機づけられたものであることが明らかになる。さらにかれは「革命のはじまり」としての戦争はまだおわっていないとつづける。マンにとって「革命」はまだおわっていないのである。マンは現実の共和国を超えたところに将来のドイツを求めていた。したがってそれを実現すべき「革命」もまた，現実の革命を超えるものとして継続されねばならない。「革命」は，東と西の「あいだ」に<1914年の理念>を実現するものとしてのドイツを築く方向に，「古い世界」，すなわちマンが『考察』で擁護したドイツ文化，ドイツ性を保持しつつ「新たな，より倫理的な世界へ移行」する方向に向けられねばならないだろう。

II

その後のマンの足どりを追ってゆこう。事態が政府軍の勝利によって一応の鎮静をみたのち，1919年5月中頃，かれはヘルマン・カイザーリング伯の『ド

イツの真の政治的任務』を手にし，ふかい感銘を受ける。[20] さらにかれはその年の12月，オスヴァルト・シュペングラーの『プロイセン精神と社会主義』を読んで非常な賛同を示している。[21] コミュニズムにたいする熱狂が醒めやり，現実のバイエルン・レーテ共和国，「ごろつきの独裁」[22]にまったく失望したマンは，1919年6月11日の日記のことばを借りるなら「文化的な立場に完全に身を置いて」,[23] 「保守的な理念」がふたたび広まってゆくのを感じつつ[24]カイザーリングやシュペングラーの影響のもとに，また表現主義から離反した「反革命的でナショナルな心情」をもつ若者たちとのまじわりのなかから,[25] おのれの道を摸索してゆくことになる。

そのような摸索過程のなかで著されたのが，1920年1月に執筆された『ヘルマン・カイザーリング伯への公開書簡』である。うえにあげたカイザーリングの書物にたいする感銘の結果として書かれたこの書簡は，マン自身『考察』にたいする一種の「あとがき」であるといっていることからもわかるように,[26]『考察』の延長線上に位置づけられる面を多分に持つ。そのなかでマンは『考察』におけるドイツ性を＜精神＞の原理であるデモクラシーの対極に立つもの，「たましいの原理，保持的な原理，形式の原理」(XII. 597) と措定し，『ドイツの真の政治的任務』からの引用をおこないつつおのれの保守主義ならびに非政治性を再確認する (XII. 600)。そのうえでかれは「たましいと精神のジンテーゼ」としての「文化」という考えを導入し，「文化としてのドイツ」の姿を抽象的なことばで描いて書簡をしめくくるのである (XII. 603)。「文化としてのドイツ」という概念じたい＜文化＞対＜文明＞という『考察』の基礎をなす対立図式をそのままひきずったものであり，革命の動乱を経てマンはふたたび『考察』の立場に回帰したといえなくもない。この書簡がそもそも『考察』の「あとがき」と位置づけられているのだからなおさらのことである。しかしながら『考察』の延長線上にいるというのと『考察』と同一の地点にとどまるというのではその意味するところはおのずから異なってくるだろう。前章で確認したようにマンにとって肝要なのは「古い世界」を保持したまま「新しい世界」に移行することなのであった。それゆえ，マンの保守主義は『考察』のド

イツ性を基底に持ちつつ『考察』とは微妙に異なる方向に向けられてゆく。

1920年1月19日，マンはつぎのようなことばを日記にしるす。

> わたしは，ドイツ保守主義と社会主義の結合が必要不可欠であることについて話した。それには未来があり，デモクラシーにはないのだ。[27]

デモクラシーにたいする反措定として，「ドイツ保守主義と社会主義の結合」を要請することばである。新たなドイツの摸索過程においてマンが保守主義を基軸としていたのはカイザーリングへの公開書簡で見たとおりである。けれどもそれと結合すべき「社会主義」とはいったいどのようなものなのだろうか。

マンは当時「社会主義」ということばをしばしば口にしているのだが，それが具体的な輪郭をもって語られることは一度もない。したがってわれわれは推測するよりほかにないのだけれども，かれの社会主義観の背後には，コミュニズムのばあい同様まず第一にロシア革命の存在をみとめることができるだろう。革命ロシアにたいするふかい共感をマンはすでに『考察』の末尾に記しているが（XII. 587），このような態度は，1921年9月にマンがリューベックでおこなった講演『ゲーテとトルストイ』——実証的研究の精度がますます高まりつつある今日，いまさらいうまでもないことかもしれないが，この講演は，現在『ゲーテとトルストイ』の名で流布しており，「フマニテートの問題のための断章」という副題をつけて1925年に評論集『労苦』に収録されたものとは内容的にずいぶん異なる——のなかのことばを借りるなら，かれがロシア革命のうちに，ピョートルにたいする，すなわち「人文主義的文明そのものにたいするロシア民族精神の叛逆」[28]を見ていた点に起因している。マンは，協商国にたいする，西欧デモクラシーにたいするアンチテーゼとしての社会主義ロシアに大きな共感を寄せていたのである。しかしロシアにたいする共感とドイツがボルシェヴィズム化するというのは話がべつである。マンは，かれにとっては「ごろつきの独裁」でしかなかったレーテ共和国にたいして幻滅と嫌悪以外はなにも感じていなかった。かれの目は西欧ではなく東方，つまりロシアに向

けられている。[29] けれどもドイツ的品位と秩序をなによりも重んずる保守主義者マンなのである。「社会主義」もまた，そのようなかれが受け入れることのできるものでなければならない。

すでにマンは革命直後に『ヨーロッパ新聞』を媒介として，社会主義は理念としては未来のものであるという認識を得ていた。この認識が日記に記される二日まえ，かれは『ヨーロッパ新聞』が好感の持てる理由として，それが「ナショナルで外交的な」面に向けられているということと，この新聞が「社会化とコミュニズムを国民的団結と捉えている」という二点を日記にしるしている。[30] この記述から，『ヨーロッパ新聞』が主張しマンが共鳴している社会主義とは，第一次大戦中にヨーハン・プレンゲが唱えたような，リベラリズムの対極に立ち，フランス革命に対置さるべきドイツ的社会主義，すなわち民族共同体としての「戦時社会主義」[31] の理念を戦後の新たな状況のなかへと継承している面を持つと推測してもよかろう。[32] じっさいマンは，1920年1月21日に執筆されたバイエルン国立劇場にかんするアンケートへの回答のなかで，「真の社会主義」を「人道主義的個人主義」——これはおそらく個人の権利とか幸福といった域を超えることのないもの，＜文明の文学者＞たちが標榜するデモクラシー的個人主義のことであろう——と区別して，それを「共同体的理想主義」と呼び，今日の世界的な問題は，「マルクス主義的階級社会主義を民族共同体へと精神化すること」であると述べている（XIII. 565f.)。この時期のマンにとって社会主義とは，啓蒙主義的進歩理念を根底に持つマルクス主義的なものではなく——かれが進歩理念を一笑に付していたことは『考察』あるいは1921年版『ゲーテとトルストイ』を読めば一目瞭然である——またデモクラシーを中心に据えた社会民主党のものでもない。それはむしろデモクラシー的個人主義を超克するものとして，「戦時社会主義」の理念を継承しつつ，ロシアにおいて実現した社会主義からその反西欧的・反デモクラシー的本質を受け継いでそれをドイツ化したもの，超個人的なもの—「民族共同体」に向けられた社会主義であったということができるだろう。

社会主義についてもう少し見てみよう。1920年9月5日，マンはユーリウス

・バープに宛てつぎのように書き送る。

> わたしの念頭に浮かぶドイツの理想的な将来像を，あなたもお読みになったカイザーリングについての論説のむすびでスケッチしようとしてみました。わたしはなによりもつぎのような意味で「ラディカル」ではありません。つまりわたしは社会主義がインターナショナルな性格のものだとは考えていないのです。むしろどの民族もそれ固有の社会主義を持つようになるだろうと思っています。たしかなのは，人間的なものはナショナルなもののなかにおいてのみ実現されるということです。[33]

ここに述べられているのはさきに見たマンの社会主義観を土台にしたものであるが，特徴的なのは，マルクス主義が掲げるインターナショナリズムをマンが明確に否定している点である。『考察』においてすでにマンはくりかえし，文化の領域に属しドイツ的であるコスモポリタニズムと，文明の側のものでありそれゆえデモクラシー的なインターナショナリズムとを区別していたが，[34] それがそのまま第一次大戦後も踏襲されているのである。たとえばマンは1920年12月に執筆された『インゼル出版』のなかでナショナリズムとヨーロッパ人気質という問題に触れ，コスモポリタニズムをナショナルなものとしたうえで，それに対立するもの，すなわちインターナショナリズムを「デモクラシー的均質化」と名づけている（X. 587)。マンにとってインターナショナリズムとは，各民族が持つ個々の特性をみとめず，逆にそれらを単一の原理にもとづいて標準化—平均化してしまうことであり，それにたいしてコスモポリタニズムとは個々の特性のうえに立って，つまりナショナルなものを保持したうえで相手にたいして開かれていること，相互に理解しうる共通の場を持つことを意味していたのである。[35] そのような考えをマンはおのれの社会主義観の基底に据える。いいかえるならマンにとっては社会主義もまたマルクス主義的でインターナショナルなものではなく，個々の特性のうえに立つナショナルなものでなければならなかったのである。そして，マンの目指す社会主義が本質的に

ナショナルなものであるがゆえに，それは「ドイツ保守主義」と結合することが可能だったのである。

このような社会主義を主張したのはマンひとりではなかった。当時社会主義というのはさまざまな者たちによって唱えられた「合言葉」[36] だったのであり，マンの発言もそのような流れに乗ってなされたものということができる。たとえばかれがふかい感銘を受けた『ドイツの真の政治的任務』のなかでカイザーリングは，ドイツの保守主義を「新しい社会主義的な世界情勢のなかでドイツ民族を指導者となるべく運命づけている」ものと捉え，[37] マンとおなじようにドイツは敗戦によって新しい世界を構築する可能性を有するがゆえに戦勝国よりも優位に立ちうるという見解のうえに立って，未来を社会主義のうちに見ている。[38] さらにマンはさきに見たようにかれ同様「保守主義と社会主義の結合」を訴えていた[39] シュペングラーの『プロイセン精神と社会主義』に大きな賛同を示しており，それゆえマンの社会主義観には，シュペングラーが主張するきわめて保守的かつ強権的な＜プロイセン社会主義＞からの影響も多分にあると考えられる。しかしながら当時の思想潮流からの影響とはべつに，マン自身にとって，「ドイツ保守主義と社会主義」を「結合」するというのはいったいなにを意味し，かれのドイツ像とどう関連していたのだろうか。カイザーリングへの公開書簡にふたたび目を向けてみよう。

公開書簡のなかでマンは「反動」あるいは「蒙昧主義」を「センチメンタルな粗野」と決めつけ，自分自身をそのような立場，「ポグロム主義的君主主義者や愛国主義のごろつきども」からきびしく区別している (XII. 601f.)。このような態度はまず第一に，『考察』の著者であるかれは当時少なくとも左翼陣営からは「反動」と攻撃されていたであろうし，それとは逆に右翼の手によって『考察』がかれの意に反していいように利用されていたであろうという事情にもとづくものと考えられる。しかしながらよりふかい次元において，保守主義に内在する危険を知りつくしているマンの姿をわれわれはここから読み取ることができる。公開書簡執筆から十日あまりのちの1920年1月18日，マンはカイザーリングに私信を送っている。そのなかでかれは，「ドイツ人は保守的であ

る」という『考察』に何度も引用されていたヴァーグナーのことばを持ち出したあと，「まさにそれゆえに，なによりも重要なのはドイツ保守主義の精神化なのです」とつづける。[40] 保守主義的立場に立ってたましいのみを擁護するならば，容易に反動へ，蒙昧主義へ陥ってしまう危険があることをマンは知悉していたのである。『考察』においてマンは過去に沈潜し，せまり来る世界にたいしてロマン主義的世界をひたすら擁護しようとした。しかしいまのマンにとっては，前章で確認したように，過去にとどまること，復古主義は問題にならない。ドイツ保守主義は過去にしがみつくのではなく，精神化されることによって，あるいは公開書簡のことばを借りるなら，「たましいと精神のジンテーゼ」をはたすことによって，西欧デモクラシーを超えるものへと変貌を遂げ，「革命」の根本動機たる＜1914年の理念＞を実現しうる新たな地平を獲得しなければならないのである。マンが『考察』と同一地点ではなくその延長線上にいるというのはつまりこういうことなのである。問題は，『考察』におけるドイツ性を保持したまま第二帝政期とは異なる次元に向けてドイツが脱皮することだったのである。それは同時に，『考察』の保守主義を過去にではなく未来に向けて開かれたものにすることを本質的に要求する。そのようなマンにとって，ドイツが新たな次元へと跳躍するためのいわばスプリングボードたりうるもの，いいかえるなら，かれのドイツ像に新しさ，未来性を，ということは西欧にたいする優位性を保障してくれるもの，それが，社会主義だったのである。したがってマンが日記にしるしたことば，「ドイツ保守主義と社会主義の結合」ということばは，当時のかれの政治的・思想的方向性を根底において決定づけるものであったということができる。そこからわれわれは，社会主義が理念として内包する未来性をナショナルで保守的な立場に組み込み，そうすることで西欧デモクラシーを超克し，協商国よりも優位に立ちうるドイツを摸索してゆこうとするマンの姿を読み取ることができるだろう。

だがそれはどのようなドイツなのか。さきに引用したユーリウス・バープ宛の手紙でマンは，「ドイツの理想的な将来像」を「カイザーリングについての論説のむすびでスケッチ」しようとしたと述べていた。これはこの章のはじめ

に触れたカイザーリングへの公開書簡の末尾にある「たましいと精神のジンテーゼ」をあらわす「文化としてのドイツ」について語られる部分に相当する。かれはそれを一年八ケ月後，リューベックでの講演『ゲーテとトルストイ』，ゲーテとトルストイが集約的に体現するそれぞれの民族性を強調することによって反人文主義的・反西欧的・反デモクラシー的色彩をきわめて濃厚に与えられたこの講演の末尾で，しかも『考察』の「あとがき」という面を多分に持つカイザーリングへの公開書簡とは異なり，ドイツの若者たちに向けて発せられた強いメッセージとともにそのままくりかえしている。それゆえ1920年前後の，とはつまり＜転向＞以前のマンのドイツ像を考えるにあたって，ここでは『ゲーテとトルストイ』の末尾に着目してみたい。

講演をしめくくるまえにマンはまず，「あの人文主義的・文学的教養概念が影響をおよぼすことによって，いったいドイツの社会主義がなんらかの損害を蒙ったでしょうか」と問いかける。[41] この「ドイツの社会主義」とはいうまでもなく「ドイツ保守主義」と結合可能な「社会主義」のことである。そのような「社会主義」がドイツに無傷のまま根をおろしていることを確認したうえで，マンは「今日の問題」，すなわち「地中海的・古典的・人文主義的伝統」は永遠のものなのか，それとも「市民的でリベラルな時代」の「付随物」にすぎず，その時代とともに滅んでしまうのかという問題を提示する。[42] ロシアにおいてそれは滅んでしまったが，ドイツにかんしてはこの問題は未決定のままだとかれはつづける。しかしながらこの講演全体に浸透している反人文主義的態度，また「人文主義的・市民的であると同時にリベラルな時代はおわりつつある」(X. 867) という1921年6月のダンテにかんする小論にあらわされた認識，さらには「西欧のリベラリズムは破産したのであり，新たな形態，新しい運命はヨーロッパの東方からやって来る」という1922年1月10日のインタヴューのことば[43]などから考えて，少なくともこの時点において人文主義的伝統はドイツにおいても死に瀕しているとマンは見做しており，それにかわるものとして「社会主義」を思い描いていたと考えてさしつかえなかろう。

以上のような時代認識のうえに立ってマンは，当時E・R・クルツィウス等

にも波紋を投げかけた[44] アルフォンス・パケの『ラインとドーナウ』にある「ローマかモスクワか」という「アンチテーゼ」[45] を援用しつつこう呼びかける。

> 西の人文主義的リベラリズム，政治的にいうならデモクラシーは，わたしたちのところで多くの地歩を占めています。けれども全ドイツを掌中におさめているわけではありません。「ローマかモスクワか」という決定をせまられて，モスクワを選んだ若者たちは，ドイツの若者の最悪の部類ではけっしてないのです。しかしながらこの若者たちはまちがっています。答えはこうでなければならないのです——ローマでもなく，モスクワでもなく，ドイツ。[46]

そしてマンはローマでもモスクワでもないドイツの姿，カイザーリング宛公開書簡の末尾にある「文化としてのドイツ」の姿をそのまま描いて講演をしめくくるのである。それはたとえば，「声部がこのうえなく芸術的な自由のなかで，たがいに響き合いながら高められた全体につかえる，そういう賢明につくられたゆたかなフーガのようなドイツ」，「畏敬と連帯，永続性と現在，誠実さと大胆さ，これらのものにあふれ，保持的であるとともに創造性のあるドイツ，諸民族の模範であるドイツ」[47] といったぐあいにきわめて具体性に乏しい，どうにでもとれるものである。したがって問題はそれが置かれている文脈だろう。

抽象的かつ非政治的なことばで語られるドイツ。しかしながらそれが語られる文脈をとおしてわれわれの眼前に浮かびあがって来るのは，西欧の人文主義的リベラリズムを超克するものとしてドイツ保守主義と結合した「社会主義」のうえに立つドイツ，ローマでもモスクワでもない，つまり東と西のあいだに位置し，しかも東に顔を向けているドイツ，[48] <1914年の理念>に根本的に動機づけられ，あらたな次元に向けられたドイツの姿である。われわれはここに，11月革命のさなかにマンの内部に胚胎した「ボルシェヴィズムと西欧金権政治とのあいだに政治的になにか新しいものをつくり出す」という考えが，

ひとつの明確な像に結実しているのをみとめることができるだろう。

Ⅲ

1920年前後のマンと当時の思想潮流との関係については，この時期の日記が刊行されて以来，とくに近年，シュペングラー，アルフレート・ボイムラー，ハンス・ブリューアーとの関係について論じたH・クルツケや，[49] 第1章で触れたようにナフタ像の問題から<中世的コミュニズム>を中心に据え，日記を詳細に読むことでハインリヒ・フォン・アイケンやセルゲイ・ブルガコフ等の影響を綿密に跡づけたヴィスキルヒェンを中心に論考がなされている。じっさい，これまでの考察からも明らかなようにマンはシュペングラーやカイザーリング等から一定の影響を受けつつおのれの道を摸索していたのであった。しかしこの時期のマンの思想について考えるにあたって，あるいはより限定的にいうならわれわれがここに取り出したマンの保守思想の一断面を考えるにあたって，けっして無視することのできない，それにもかかわらず従来の研究ではなおざりにされがちであり，おもにナフタ像との関連で少し触れられるにすぎない人物[50]がひとりいるように思われる。それは，『第三帝国』の著者にして通常ただちに「保守革命」の代表とされる人物，アルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルックである。

マンとこの人物との関係について考えるまえにまず「保守革命」について整理しておこう。「保守革命」が思想的かつ政治的に大きな問題となるのは1924年から1929年にいたるいわゆる相対的安定期の前後のことである。後者は経済恐慌による社会不安が増大するなか，エルンスト・ニーキッシュ，ハンス・ツェーラーを中心とする<タート・クライス>やオットー・シュトラッサー等がそれぞれの立場に立って主張したものであり，少なくともナチス左派とのイデオロギー的関連性を有している。この時期にはマンはすでにナチズムと決定的に対決する姿勢を取っており，ナチスのイデオローグにからめとられてゆく「保守革命」にたいしても，たとえば1931年の『礼節の復活』のなかできびしい批判

をおこなっている（XII. 659）。われわれの関心を惹くのはむしろヴァイマル前期に知的世界の前面にあらわれた「保守革命」である。しかしながら問題をヴァイマル前期にしぼるとしても，「保守革命」というものはひとつの明確な理念なりイデオロギーのもとに捉えられるものではない。それは，蔭山宏もいうように「特定の理論を根拠にした＜思想体系＞であるというより「時代精神」を象徴する社会思潮」[51] なのであり，したがって特定の個人なり集団なりを指すものでもない。「保守革命」とはすなわちきわめて多様な思想内容を包括するものなのである。とはいっても そこには，多くの研究者が指摘するように，[52]「保守革命」という名で括りうる時代に典型的な一定の特徴を見ることはできる。

われわれの考察にとってとくに重要な点を蔭山の研究に依拠してまとめるとつぎのようになる。「共和国前期にほぼ出つくされた」「保守革命」論の主要な論点に見られる共通の立場とは，「「反西欧」のナショナリズム」と結びついた反ヴェルサイユ体制＝反共和国的姿勢であり，このナショナリズムをマルクス主義的社会主義とは直接関係を持たない，むしろ「「リベラリズム」の克服」を意味する「ドイツ的社会主義」と統一させようとする態度である。[53] 蔭山のこの指摘に，さらにK・レンクがいう，西欧文明にたいしてドイツ独自の，より価値のある文化的伝統を対置しようとする姿勢，[54] ならびに第二次大戦後いちはやく「保守革命」についての研究を手がけたA・モーラーが指摘する，旧来の保守主義や1918年以降王政復古を目指す反動勢力とおのれをきびしく区別しつつ，同時に啓蒙主義的進歩思想も信じないという態度[55]をつけ加えておけばいいだろう。

「ドイツ的社会主義」，その根底にある反西欧的・反デモクラシー的姿勢，「保守革命」一般に見られる特徴は，『ヘルマン・カイザーリング伯への公開書簡』における反「反動」発言をも含めて，これまで検討を加えてきた1920年前後のマンの思想的・政治的立場と平行関係にあるといっていいものであり，事実モーラーはこの時期のマンを明確に「保守革命」のなかに位置づけている。[56] しかしマンの思想は『第三帝国』の著者メラーと，またかれを精神的支

柱とするグループ，その名もヴェルサイユ条約が調印された1919年6月にちなむ＜6月クラブ＞と，じっさいにはどのような関係にあったのだろうか。以下では，「保守革命」を五つのグループに分けるモーラーの分類にしたがってメラーを中心とするグループを＜青年保守派＞と呼び，＜保守革命＞ということばをこのグループの思想をあらわすものとして，一般にいわれる「保守革命」から区別して限定的に使用することをことわったうえで考察を進めたい。

マンの日記に目を向けてみると，メラーの名はまず1918年10月15日，メラーおよびメレシュコフスキー共同編集によるドストエフスキー全集に収録された，ロシア民族にかんするメラーの「非常に興味ぶかい」序文を，『魔の山』の主要人物のひとり，ショーシャ夫人との関連で読んだという記述のなかにあらわれる。[57] ここではロシアとのかかわりのなかでマンがメラーを読んでいる点を確認しておこう。

その後メラーの名は，＜6月クラブ＞の機関誌『良心』に掲載されたかれの「すばらしい論説」を読んだという1920年3月4日の記述にあらわれるだけである。[58] しかしマンがこの『良心』を定期購読していたという事実，[59] またこの機関誌を「自分にとってもっとも好感のもてるもの」と1920年4月14日の日記にしるしている[60] ことから考えて，当時マンがメラーならびに＜青年保守派＞の思想にたいしてかなり親近感を抱いていたことは疑いえないだろう。[61] さらにマンは1921年2月23日，ベルリーンの「モッツ通りで『良心』の人たちと朝食をともにした」と日記にしるす。[62] ベルリーンのモッツ通りとは＜6月クラブ＞の本部が置かれていたところであり，マンは＜6月クラブ＞の面々と個人的接触もおこなっていたわけである。あるいはまた＜6月クラブ＞の主要メンバーであり，メラーとともに『ディ　ノイエ　フロント』を編集していたマックス・ヒルデベルト・ベームと手紙のやりとりをしていたことも日記から窺うことができる。[63]

しかしなによりもまずこの＜青年保守派＞とマンとの思想的親近性を裏づける事実は，革命直後マンの社会主義観に影響を与え，「ボルシェヴィズムと西欧金権政治とのあいだに政治的になにか新しいものをつくり出す」という基本姿

勢をマンが取る契機となった『ヨーロッパ新聞』の編集者のひとりが，＜6月クラブ＞の実質的主宰者たるハインリヒ・フォン・グライヒェンであったということだろう。グライヒェンの名は日記にいく度かあらわれているが，かれにかんして興味ぶかいのは，マンがかれから『良心』とともに＜6月クラブ＞の機関誌のひとつであった『リング』に加わらないかと誘いを受けている点である。マンは1920年7月22日付のグライヒェンに宛てた手紙で，『リング』には非常に共感を寄せてはいるものの，基本的に若い人たちの集まりである『リング』グループに参加することはできない旨書き送っている。[64] これは当時どのグループにもくみすることを避けていたマンの慎重な姿勢をあらわすものであるが，一方ここからは，＜青年保守派＞のほうはマンを自分たちの側に取り込もうとしていたことがわかる。おそらくかれらはおもに『考察』の著者たるマンに共鳴してのことであろうが，しかしかれらがマンの戦後の発言を等閑視していたとは考えられない。むしろ注意ぶかく耳をすましていたことだろう。つまり『考察』だけでなく戦後の発言をも含めて，＜青年保守派＞はマンと自分たちの主張との共通性を見出していたのである。

以上のようにマンと＜青年保守派＞とのあいだには交流があり，前者が後者にたいして共感を抱く一方，後者は前者に思想的共通性を見出していた。さきに見たように「保守革命」一般に見られる特徴をマン自身共有していたのだから，これはある程度当然のことといえる。しかし両者，あるいはマンとメラーを結び合わせるのは，はたして反デモクラシー的・反西欧的方向性だけなのだろうか。たとえそうであるとしても，この方向性を決定づける思想的・政治的立場において マンとメラーは それぞれ どのような 関係に立っていたのだろうか。

1912年，マンはすでに通常メラーの名と結びつけられる「第三帝国」ということばをもちい，それを「精神と芸術」「認識と創造性」などの「ジンテーゼ」と 見做している (XI. 564)。その 意味するところはべつとして 両者はともに「第三帝国」ということばを 口にしていたわけであるが，わが国においてもっともはやい時期にマンとメラーの関係を論じたもののひとつに数え入れられる

『ふたつの第三帝国』のなかで円子修平は，マンとメラーは一時期「保守的民族主義的立場」を共有していたが，ヴァイマル共和国時代に「きわだった背馳をしめす」としたうえで，マンの唱える「第三帝国」を，かれの「芸術の礎石である精神であり，人間性であり，これらふたつと結んだ」ドイツ性と捉え，それにたいしてメラーの「第三帝国」をナチズムにつながる「いつわりの第三帝国」と呼んでいる。[65] マンの「第三帝国」は，歴史を「父と子と聖霊」という「連続的時代の上昇過程」と捉え，第三の時代，すなわち「聖霊の時代」を「聖徒たちのみ国」＝千年王国と見做す十二世紀の神秘主義者フロリスのヨアキム[66]に直接もとづくものではなく，むしろ霊と肉を超越した来るべき時代としての「第三帝国」を予言するイプセンの『皇帝とガリラヤ人』に，さらにはクルツケが推測するようにメレシュコフスキーの『トルストイとドストエフスキー』に[67]影響を受けたものと考えられる。またヴァイマル・デモクラシーの支持者となったマンは当然のことにナチズムに剽窃された「第三帝国」にたいしてはげしく立ち向かっており，たとえば1932年10月，ウィーンの労働者をまえにしておこなわれた講演においても，ナチスによって喧伝される「第三帝国」にたいして，芸術としての，「肉体性と精神性，自然性と人間性の統一」を意味する「完全な「第三帝国」」を擁護している（XI. 897）。だからマンはたしかに「第三帝国」をかれにとって芸術の本質をなすものと見做していたということができる。しかし1920年前後のマンにとってはいささか事情が異なるように思われる。そこでまず，この時期のマンと「第三帝国」について考えてみよう。

1915年，『スウェーデン日日新聞編集部への手紙』のなかで，ドイツが戦争を遂行する理由についてマンはつぎのようにいう。

> なぜならドイツは，第三帝国をドイツにもたらしてくれるものを戦争のなかにみとめたからなのだ。しかしドイツの第三帝国とはいったいどのようなものなのだろうか——それは，権力と精神のジンテーゼである。——このジンテーゼこそ，ドイツが夢見のぞむもの，その最高の戦争目標なのだ

(XIII. 551)。

「最高の戦争目標」たる「権力と精神のジンテーゼ」を意味する「第三帝国」，これは少なくとも芸術的なものではない。むしろ非常に政治的と呼べるしろものである。だが大戦中，しかもドイツがなお優位に立っていたときにあらわされたこの「権力と精神のジンテーゼ」を意味する「第三帝国」は，1918年以降戦後の激変のなかで，ジンテーゼとしての本質を保持しつつも変質してゆかざるをえないだろう。

本稿第1章で見た『魔の山』執筆再開の決意を伝える日記のつづきにマンはこうしるしている。

> 新たなものは，精神と肉体が一体となったものとして人間を捉える新しい考え方（たましいと肉体，教会と国家，死と生といったキリスト教的二元論の止揚）のなかに本質的にあるといえるが，これもまたすでに戦前に考えていたことなのだ。[68)]

革命とともに戦前のジンテーゼ問題が新たなものとして，しかもまったく異なる状況のもとにふき出して来たのである。「権力と精神の ジンテーゼ」という図式だけではもはや通用しない。

> メレシュコフスキーがロシア の「批評」を（…）「無意識の 創造から創造性のある意識への移行」と名づけているところで，かれはそれにさらにもうひとつの，より大きな名を与えている。かれは「批評」を「宗教のはじまり」と呼ぶのである。宗教のはじまりとしての批評！それはまさしくニーチェである！ニーチェはキリスト教と「禁欲的理想」にたいして極端な手段をもって 戦ってきた（…）。しかしニーチェは 実証主義的啓蒙のためにキリスト教にたいしておのれの雷光を投げつけたのではなく，新しい宗教性（…）のために，イプセン が（…）語る「第三帝国」，その総合的理

念が何十年もまえからこの世のはてに立ち昇っており，その光を人間たちの貧しい国のすみずみにまではなっている，あの「第三帝国」の名において雷光を投げつけたのである。「第三帝国」のジンテーゼは，啓蒙と信仰，自由と拘束，精神と肉体，「神」と「この世」とのジンテーゼである。それは芸術的にいうなら感覚性と批評性とのジンテーゼであり，政治的にいうならば，保守主義と革命とのジンテーゼである。というのも保守主義は精神さえあれば，そこいらの実証主義的でリベラルな啓蒙主義などよりもはるかに革命的たりうるからなのだ。そしてニーチェ自身そのはじまりから（…）保守革命以外のなにものでもなかったのである。(X. 597f.)

1921年1月に執筆された『ロシア文学アンソロジー』のなかでマンはメレシュコフスキーとニーチェの名を出しながらこのように語る。「啓蒙と信仰」，「自由と拘束」，「神」と「この世」のジンテーゼとしての「第三帝国」——ここには戦前からの問題を新たな地平に定位された「第三帝国」として解決しようとするマンの意志があらわれており，芸術的にマン自身に引きつけていうならば，それは『魔の山』において対象化されるべきものである。しかしマンはさらにつづけてこのジンテーゼは政治的にいうなら「保守主義と革命」とのそれだという。これはどういうことだろうか。

「第三帝国」をめぐる戦いはロシアにおいてもドイツにおいてもつづけられており，なんらかのかたちでそれにかかわり合うことが「なによりも重要な問題なのだ」とマンはいう(X. 599)。ここには政治的な意味ではロシアに向けられたまなざし，すなわち，もはや死に瀕している人文主義的文明にしがみつく西欧には「第三帝国」を構築する可能性は残されておらず，それにたいしてロシアは，方法は異なるにせよドイツと共通の目標を追っているのだという敗戦以降とくに顕著になった認識をみとめることができる。このことから「保守主義と革命とのジンテーゼ」を意味する「第三帝国」は，新たなドイツを摸索する当時のマンの態度に基本的に規定されたものであることがわかる。それを裏づけるかのように，うえにあげた「第三帝国」についての発言を導入するにあ

たってマンはつぎのように述べている。

> じっさい，十九世紀の，市民時代の息子を新たな時代と関係づけ，硬直と精神的な死から護って未来へと橋渡ししてくれるのは，ふたつの体験なのである――つまりニーチェ体験とロシア的本質の体験なのだ。(X. 597)

そしてマンによるならニーチェとロシア的本質，このふたつに決定的に共通しているもの，それが「宗教的性格」(X. 597)，つまり「新たな人間性と新たな宗教」(X. 598) としての「第三帝国」を求める志向なのである。ともに「第三帝国」を志向するニーチェとロシア的本質は，マンにとって本質的に十九世紀の子である自分自身を「新たな時代」と結び合わせてくれる存在だったのである。とするならニーチェとメレシュコフスキーに依拠して語られる「第三帝国」も，おのずから前方に向けられたものになるだろう。だがなぜ「保守主義と革命とのジンテーゼ」なのか。マンはすでにカイザーリングへの公開書簡において将来のドイツ像との関連で「たましいと精神のジンテーゼ」を訴えていた。またカイザーリング宛私信では「ドイツ保守主義の精神化」を要請してもいた。そのさいかれにとって「たましいと精神のジンテーゼ」あるいは「ドイツ保守主義の精神化」とは，前章で見たようにドイツが新たな次元に向けて跳躍するための必要条件をなしていたのであった。それゆえニーチェとメレシュコフスキーの名において政治的に「第三帝国」を実現すること，いいかえるなら保守主義が精神を持つことによって革命的になる，つまり「保守主義と革命とのジンテーゼ」をはたすことは，マン個人のばあいとおなじようにドイツを「新たな時代」と結び合わせること，すなわち十九世紀ドイツを未来へと架橋することを意味していたのである。したがってそれは，「ドイツ保守主義と社会主義の結合」という日記のことば同様，前章で照明をあてた1920年前後のマンの思想的・政治的ヴェクトルの方向性を根底において決定づけているものであるといえよう。

以上のように1920年前後のマンにとって「第三帝国」は，一方においてかれ

の芸術観の本質的な部分をなすとともに，他方，それは政治的な意味をもになっていたのであり，「保守主義と革命とのジンテーゼ」として，新たなドイツの摸索過程におけるいわば理念的中核をなしていたのである。つぎにメラーの思想に照明をあててみよう。

1876年に生まれたメラーの保守主義は，『考察』におけるマン同様パウル・ド・ラガルドから強い影響を受けたものであり，[69] それゆえ本質的に徹底した反リベラリズム，反デモクラシーの姿勢に貫かれている。またメラーも1914年8月の熱狂にあずかった者のひとりであり，[70] この点でもマンと，また1914年8月1日を「世界史の最も偉大な日」と呼んだシュペングラー[71]等当時の多くの知識人たちと体験および出発点をともにしている。ただメラーにおいて特徴的なのは，第一次大戦勃発にともなってドイツにもどるまでのほぼ二十年にわたってかれが外国を遍歴していた点であり，この遍歴生活からメラーは，かれの「全思想を解く鍵的概念」とF・スターンがいうもの，「各民族は，それ固有の国民的性格を持っており，また世界の諸民族は若い民族と老いた民族(…)——未来のある民族と未来のない民族——に分けられる」[72] という考えを得たのであった。メラーにとって若い，未来を有する民族とは東方の民族のことであり，老いた民族とは西欧の民族を意味する。[73] メレシュコフスキーとの交わり，ドストエフスキーへの傾倒とも合わせて，ここにメラーの東方—ロシアへ向けられたまなざしが確たるものとなる。

前提として以上のような点を確認したうえでメラーの主著『第三帝国』を中心に考察を進めようと思うが，『第三帝国』は1922年に執筆され翌23年に刊行されたものだから，その当時すでに共和国支持を表明していたマンがこの反共和国的な書物から直接影響を受けたということはありえない。しかし『第三帝国』はメラーの思想の総括という性格を多分に持つものなので，1920年前後のマンとメラーとの関係を考えるにあたってこの書物を参照してもけっして強引なことにはならないと思われる。

『第三帝国』のなかでメラーは，コミュニズムのなかに見られる「ドイツ的な概念」を，「中世的な思考法，農民戦争の理念，トーマス・ミュンツァーの

思想」と結びつける。[74] あるいはレーテ思想を「中世のギルド制度」になぞらえてもいる。[75] このような中世とコミュニズムを結び合わせる<中世的コミュニズム>観あるいは中世志向は，本稿第1章で少し触れたように当時マンをも含めた広汎なインテリ層に広まっていたものであるが，しかし範囲を限定するならレンクがいうように「新たな中世」を求める動きとして「保守革命」に特徴的なものであり，[76] またモーラーの指摘にしたがうなら「中世的帝国」は<青年保守派>の「理想像」だったのである。[77] メラーはこのような「ドイツ的な概念」としての<中世的コミュニズム>を「ドイツのデモクラート気質」とつき合わせたうえで，後者は「西欧の，あるいは東方の理念にたいしてドイツの問題」を「対置することができなかった」といい，「革命の共和主義者」またその手になる現実の共和国を非難する。[78] この論法の背後から中世志向とともにメラー的<保守革命>思想が持つ本質的特徴のひとつを見て取ることができる。つまりメラーにとってドイツは，西にたいしても東にたいしても自己を主張できる存在でなければならないのである。

西と東に向けられたドイツ。これはただちにまんなかに位置するドイツ，あるいは中間の国ドイツという思想に結びつく。事実メラーはつぎのようにいう。

> ドイツのナショナリズムはドイツを保持しようとするだろう。なぜならドイツはまんなかに位置しているからだ。なぜならこのまんなかの位置からのみヨーロッパの均衡は保ちえるからだ。[79]

つづけてかれはこの中央の立場から「東に顔を向けてのみ」われわれはわれわれの課題を解決することができるという。[80] このような考えは『第三帝国』においてはじめてあらわれるものではない。『ドイチェ　ルントシャウ』の1920年6月号に掲載された『シュペングラーとの対決』という評論のなかでメラーはすでに，「ドイツはまんなかに位置する」というカントのことばを引用しつつ，「これは地理的確認以上のものであった」と述べている。[81] そしてかれは，「われわれは仲介の役割をはたす民族である」ということを確認したうえで，

それでもなお，ドストエフスキーの「プロテストする国ドイツ」ということばのうえに立って，「西欧にたいするプロテスト」を貫徹しなければならないとつづけるのである。[82]

メラーのドイツ観の根幹をなすものは，『考察』から1920年前後にいたるマン同様，東と西のまんなかに位置し，東に顔を向けつつ，しかし東にたいしても西にたいしても自己を主張できるドイツということができる。このようなドイツ像を抱くにいたったメラーにとって革命とはいかなるものだったのだろうか。「革命を勝ち取ろうではないか！」[83]「革命的」と名づけられた『第三帝国』第1章にモットーとして掲げられているこのことばは，メラーの11月革命にたいする態度を端的にあらわしている。メラーの考えでは，「ひとつの民族の革命はナショナルなものでしかありえない」のだが，ドイツの革命家たちは「ドイツの革命」を西欧的な，イギリスとフランスを模範とした革命，「リベラルな革命」にしてしまった。[84] それゆえ革命はドイツ独自の方向へ軌道を修正されねばならない。これが，「革命を勝ち取ろうではないか」ということばの意味するところである。それは具体的にいうならば，「革命の理念と保守的な理念を結合」させるということになる。[85] かれは11月革命が結果としてまとうにいたった政治的な衣装を「リベラルな革命」として否定してはいるが，ドイツが新たな段階へ飛躍する契機としての革命はけっして否定していない。ただそれはリベラルな方向ではなく保守的でナショナルな方向に向けられねばならないのである。革命にたいするメラーの態度は，態度としては，革命はまだ継続中と考え，それを現実の革命を超えるところに位置づけるマンの態度と平行関係にあると考えていいだろう。

「革命的」はつぎのようなことばでしめくくられる。

> われわれは戦争と革命をひとつの手段としよう。それでもって，われわれの歴史の諸問題を政治的に解決するのだ。戦争と革命がなかったなら，それらはけっして解決されなかっただろう。[86]

このことばの直前メラーは，ドイツ革命によって生じた問題は「社会主義の問題」だという。[87]「革命的」のつぎの章が「社会主義的」と題されていることから，この「社会主義の問題」は解決すべき諸問題のひとつ，あるいはその中心的なものと考えることができる。メラーは「ドイツ的社会主義の問題」を，「技術の，人口過剰の，あらゆる民族が敗れた世界大戦の時代にあって，十九世紀と十八世紀の生活秩序に，つまりデモクラシー，リベラリズム，議会主義にとってかわることを世界史の意志によって使命づけられている新たな世界秩序の問題」と置きかえる。[88] 革命のなかから「新たな世界秩序の問題」として，つまりもっともアクチュアルなものとして姿をあらわしたのが「社会主義の問題」だったのである。この問題の解決，すなわち西欧ならびにそのリベラリズム，デモクラシーを超克する「新たな世界秩序」としての「社会主義」の確立は，メラーの論法にしたがうなら「革命」の終結地点，「革命の理念と保守的な理念」が結合された地点においておこなわれるはずである。しかしそれはいったいどのような「社会主義」なのだろうか。

当時の多くの知識人同様メラーが抱いていた社会主義観もロシア革命から大きな影響を受けている。メラーにとってロシア革命は，——これはマンの考えとも共通するのだが——西欧的なものとなったツァーリズムにたいするロシア民族の拒否解答を意味する。[89] このような考えがメラーの民族観，西欧の民族には未来がないのにたいしてロシアおよび東方は若い民族であるという民族観と結び合って，ロシア革命によってはじめて現実のものとなった社会主義が西欧にたいするアンチテーゼとしての意味をにないはじめる。しかしながらロシアの社会主義＝ボルシェヴィズムはあくまでロシア民族にのみふさわしい社会主義の形態にすぎない。[90] ドイツに求められるのはおのずからロシアとは異なったものになるだろう。「社会主義的」のむすびでメラーはこういう。

> マルクス主義がおわるところに，社会主義がはじまる。ドイツ的な社会主義が。この社会主義は，人類の精神史のなかであらゆるリベラリズムに，十九世紀の無気味な力であり，それによって社会主義もまた結局その足も

とを掘りかえされ，ばらばらにされてしまったリベラリズムに，(…) つまりいまなお議会のなかに忍び込みデモクラシーなどと称している西欧精神のあらゆるリベラリズムにとってかわることを使命づけられているのだ。[91]

メラーは「ドイツ的な社会主義」について具体的にそれがどのようなものなのかはほとんど記していない。これはレンクが指摘しているように，「保守革命」によってなされる社会主義の要請がもっぱら「意識の変革，こころと頭の革新に専心し」，「社会的さらには経済的構造の問題」にはまったく取り組もうとしなかった[92]という事実によるものであるが，『第三帝国』の内容から見てメラーのいう社会主義とはおおむね，中世ギルド制のような経済システムのうえに立つ民族共同体的国家を志向したものと考えることができる。[93]

社会主義の具体的な姿については曖昧なままである。しかしながらメラーの社会主義が立ち向かうところ，それについてはきわめて明瞭に語られる。マルクス主義，リベラリズム，デモクラシー，西欧精神である。もともとラガルドに強い影響を受けたメラーにとってリベラリズムはいわば不倶戴天の敵であり，それゆえかれの社会主義が反リベラリズムを核とするのは当然のことといえる。一方メラーは『第三帝国』の随所でマルクス主義が主張するインターナショナリズムを口をきわめて非難する。[94] さきに確認したように第一次大戦まえの遍歴時代にメラーは，各民族はそれぞれ固有の性格を持つというかれの思想の根幹をなす認識を得たのであった。したがってマルクス主義の掲げるインターナショナリズム，個々の国民の特性を捨象し差異を抹消したところに成り立つインターナショナリズムは，かれにとってはまったくのナンセンスなのである。社会主義はけっしてインターナショナルなものではない。ロシア民族にとってボルシェヴィズムがそのふさわしい形式であったように，それぞれの民族にはその民族にふさわしい社会主義がある，いやそのような社会主義しかありえないのである。イギリスにはイギリスの，ドイツにはドイツの。これがメラーの社会主義観の基底をなすものである。

「どの民族も独自の社会主義を持つ。」――われわれはこのことばをどこかで耳にしなかっただろうか。前章で検討を加えたマンのユーリウス・バープ宛書簡にあったことば，「どの民族もそれ固有の社会主義を持つようになるだろうと思っています」ということばに酷似している。しかしこれはマンのことばではない。「社会主義的」にモットーとして掲げられたメラーのことばなのである。[95] これは偶然なのだろうか。むろん1923年に刊行された『第三帝国』がマンになんらかの影響をおよぼしたとは考えられない。しかしながらこの書物は前述のようにメラーの思想の集大成として性格づけられるものであり，事実かれはマンの上記バープ宛書簡のひと月まえにあたる1920年8月，『良心』に掲載された『ロシア』という評論のなかで，「どの国も独自の社会主義を持つ」という発言をおこなっているのである。[96] インターナショナリズムを拒否した独自の社会主義観，その核心をなす反西欧的・反リベラリズム的・反デモクラシー的特性，ならびにその社会主義がもつ新たなドイツに向けられた方向性，それに加えて1920年前後のマンが＜青年保守派＞と交流しており，＜6月クラブ＞の機関誌『良心』に大きな共感を寄せていたという事実，これらのことを考え合わせるなら，マンとメラーの発言に見られる類似をたんなる偶然といってしまうことはできないだろう。いくら控え目に見ても，マンとメラー，このふたりのあいだには，少なくとも社会主義にかんしては思想的親縁性が存在したということはみとめざるをえないだろう。問題をマンに引きつけていうならば，前章で照明をあてたかれの社会主義は，メラーが主張する「ドイツ的社会主義」と本質的な部分でかさなり合っていたのである。『ロシア』のなかでメラーはいう。

> しかしわれわれがドイツ的な社会主義を手に入れたなら，それはひとつの力となる。それが社会主義的だからなのではない，それが，ドイツ的だからなのだ。[97]

このことばはメラーのみならず，ドイツ的社会主義を摸索していた当時のマン

の心情をもあますところなくいいあらわしているとはいえないだろうか。

以上のような考えが実現される場，あるいはべつのいい方をするならば「革命の理念と保守的な理念が結合」する場としてメラーが措定したのが「第三帝国」であった。それはドイツという東と西のまんなかにおいてうち立てられるべきものであり，そこには「土台」として「ドイツ的社会主義」が置かれるだろう。[98]

しかし社会主義のばあい同様「第三帝国」もまた具体的な像を結ぶことはない。「第三帝国の思想」とは「奇妙にぼんやりした」ものであり，「徹頭徹尾彼岸的なもの」なのである。[99] だが同時にこの思想は「現実の思想」にならねばならないとも語られる。[100] ひとことでいうならメラーにとって「第三帝国」とは，「ヨーロッパが激動するなかにあって，われわれが政治的に達成しなければならない統合の帝国」[101] なのである。

メラーの「第三帝国」がフロリスのヨアキムのものと直接関係を持たないことは研究者のあいだでほぼ一致しているが，K・ゾントハイマーはそれを，神聖ローマ帝国，ビスマルク帝国につづく「未来のドイツ国家，大ドイツ統一帝国」と位置づけている。[102] それにたいしてスターンは，「メラーにとってアクセントは，神秘的な帝国ではなく，魔術的な「三」という数字のほうにあった。というのも「三」という数字は，ドイツ的生の大きなアンチ・テーゼ（…）は，高次の調和のとれたジン・テーゼの下に包摂されうるという彼の希望を具体化するものだったからである」という指摘をおこなう。[103] たしかにメラーはビスマルク帝国のつぎに到来すべき「第三帝国」という発言をおこなってはいる。[104] しかし『第三帝国』のなかでこの帝国が，極左から極右にいたるあらゆる問題を包括する「第三の立場」，あるいはあらゆる政党を超える「第三の政党」と等置されていることから，[105] またこの帝国が「統合の帝国」と呼ばれていることから考えて，スターンのいうようにアクセントは帝国よりもむしろすべての対立を止揚し，ジンテーゼをもたらす「三」という数字のほうに置かれていたといってよかろう。[106] メラーにとって「第三帝国」とはジンテーゼを意味するもの，モーラーのことばを借りるなら，「社会主義とナショナリ

ズム，左と右といった諸対立を止揚し，包括的な統一」をもたらすもの[107]だったのである。

ジンテーゼとしての「第三帝国」。これは同時にまんなかに位置するドイツという思想に裏打ちされたものである。するとどういうことになるのだろうか。ドイツ＝まんなかという図式はマンがいだくドイツ像の根幹をなすものでもあった。[108]（これはその政治的意味あいを微妙に変えながら<転向>後も維持される。）そしてさきに見たように，1920年前後のマンにとってもまた「第三帝国」とはジンテーゼを，「精神と肉体」，「神」と「この世」との，政治的には「保守主義と革命」とのジンテーゼをもたらすものなのであった。もともとマンとメラーの「第三帝国」にはメレシュコフスキーという共通の媒介が存在したと考えられる。[109]その両者の主張する「第三帝国」がともにまんなかに位置するドイツという思想のうえに立ってジンテーゼを意味するものであるとするならば，両者が抱く「第三帝国」観は根底において通底し合っているとはいえないだろうか。それが強引すぎるというのであれば，1920年前後のマンとメラーとは，それぞれのイメージなりそれを実現する方法なりは異なるにせよ，少なくともドイツの将来を方向づけるものとして，「第三帝国」という像をともに抱いていたということはできるだろう。

むろんマンとメラーの相違もある。たとえば「革命」の捉え方がそれである。マンが革命を多分に精神的な領域において捉えていたのにたいして，『第三帝国』では到達されるべき目標は「保守的に主張され，革命的に奪取されねばならない」という表現がよく出てくる。[110]つまりメラーにとっての革命は目標を成就するための現実的な手段をも意味するのである。マンの「保守革命」が，保守主義が精神を持つことによって達成されるとするならば，メラーのそれは文字どうり保守の側による革命によってなされねばならないという側面を持っていたのである。またメラーは『第三帝国』のなかで，国民の意志を代表し，その運命をになう者としての指導者（フューラー）待望論を熱を込めて展開しているが，[111]これもマンの思想には見られない。さらにもうひとつだけ例をあげるなら，両者はともに東に顔を向けながら東と西の中間に位置するドイツという

ものを思い描いているのだけれども，そのスタンスの取り方が微妙に異なっているのである。メラーが東にのみ顔を向けているのにたいして，メラーと同じようにインターナショナリズムを拒否しながらも，しかしコスモポリタニズムを主張するマンには，メラーとは異なり，全ヨーロッパ的視座を獲得する可能性が存在しているのである。[112] 事実マンはクルツィウスを媒介として，アンドレ・ジッドを中心に『新フランス評論』誌に集まるフランスの知識人たちとの協調の可能性をさぐっており——ちなみにクルツィウスもコスモポリタニズムにかんしてマンと同様の考え方をしており，ドイツとフランスの最良の精神が「国民的な感情を基礎とした，（国際的でなく）コスモポリタン的ヨーロッパ的な志向として，出会うであろう」という発言をおこなっている[113] ——それが，じっさいのかたちとしては，1920年に『デァ　ノイエ　メルクール』に発表されたクルツィウスの『ドイツ—フランスの文化問題』ならびにそれを受けて『新フランス評論』に掲載されたジッドの『フランスとドイツのあいだの知的関係』に触発されて1921年12月に執筆された，フランスの精神と協調する必要性をみとめつつある意味で非常に居丈高な，つまり，フランスが信じる人文主義などとうに死んでしまったのであり，そのようなものにもとづく＜雄弁家ブルジョワ＞精神，＜ラテン的文明＞など捨ててしまって，いまやフランスよりも精神的に優位に立つドイツにたいしてフランスが歩み寄ろうとするならば協調は可能だという調子で書かれた，ヴェルサイユ条約を押しつけておいて善良ぶっているフランスの独善にたいする敗戦国ドイツの感情がにじみ出た『ドイツ—フランス関係の問題』となってあらわれたのであった。

以上のようにマンとメラーのあいだには本質的な点で大きな相違が見られる。しかしながらこの両者が，まんなかに位置するドイツ，ドイツ独自の社会主義，ドイツの将来を方向づけるものとしての，ジンテーゼを意味する「第三帝国」という，たがいに通底し合う思想を，しかも根本的なものとして抱いていたということも否定できない。ふたりの思想がぴたりと重なり合うというのではない。むしろずれのほうが大きいだろう。しかし第一次大戦後の一時期，ふたりは政治的・思想的に共通の立場に立っていた，あるいはこのふたりは，反

デモクラシー，反西欧というおおまかな方向性よりもはるかにふかい次元において，政治的・思想的にパラレルなヴェクトルを共有していたと見做すことはできるだろう。

日記を詳細に読むことによって同時代の思想潮流とのかかわり合いのなかから『魔の山』におけるナフタ像を解明しようとするヴィスキルヒェンもまた「保守革命」に言及している。そのまえにかれはまず，本稿第1章で見たように＜転向＞以前のマンにとって重要なものとして＜中世的コミュニズム＞について考察し，それが当時広汎に広まっていた例にエルンスト・トレルチとエルンスト・ブロッホの名をあげる。[114] むろんトレルチやブロッホにも中世志向がみとめられるのだろうけれども，しかし第一次大戦後のマンの思想との関連でいうならば，例として提示すべきは日記に一度も名を出さないブロッホなどではなくて，中世志向をその本質的特徴とするメラーであり＜青年保守派＞なのではないだろうか。たしかにヴィスキルヒェンは『第三帝国』から引用をおこない，メラーの思想にも＜中世的コミュニズム＞観が明瞭に見て取れることを指摘している。[115] しかしそれだけなのである。いやそれだけではなくてヴィスキルヒェンはメラーの思想を危険なものとして位置づけようとしているのである。[116] ＜転向＞後のマンという視点からメラーを見ればそれはそのとおりである。しかしヴィスキルヒェンがまず第一にこころがけているのは『考察』から『ドイツ共和国について』のあいだのマンであり，そのための日記の綿密な読み込みなのである。だとすればどうしてかれは日記を見れば一目瞭然のマンとメラー，あるいは＜6月クラブ＞との関係に目を向けないのだろうか。

『魔の山』第7章後半におけるナフタの革命観について，ヴィスキルヒェンは＜中世的コミュニズム＞にもとづく革命と「保守革命」とを区別し，前者をポジティヴなものとして，後者をネガティヴなものとして扱う。[117] 第6章でナフタが口にする＜中世的コミュニズム＞はマンの考えを代弁したものであるのにたいして「保守革命」は右翼の思想，マンをして＜転向＞にいたらしめたものであり，それゆえそのような思想を掲げるナフタは魔の山の世界から排除

されねばならないというのである。[118] ヴィスキルヒェンのいうとおりだとするとナフタは<中世的コミュニズム>から「保守革命」へと物語のなかで直線的に下降していることになるが，ナフタ像にかんしてはなにもいわないでおくことにしよう。だがしかし，ヴィスキルヒェンが議論のよりどころとしている<中世的コミュニズム>と「保守革命」との明確な相違というのは，「保守革命」がナフタの掲げる「保守革命」であるかぎり妥当だろうが，それが，ヴィスキルヒェンが否定的ニュアンスをまとわせて引用しているメラーの<保守革命>のばあいは妥当とはいえないだろう。1921年1月，マンが『ロシア文学アンソロジー』で「第三帝国」との関連において「保守革命」ということばを口にしているという事実をも含めて――「保守革命」について論じながらヴィスキルヒェンはこのことにまったく言及していない――マンとメラーとの思想的親縁性を考えるならば，マンのいう<中世的コミュニズム>は<保守革命>的思想の枠組のなかで考えられていた可能性のほうが，トレルチやブロッホとの関連よりもはるかに濃厚だろう。日記に明瞭に記されている<青年保守派>にたいする共感，また当時の公的，私的発言から読み取れる<保守革命>との思想的平行関係，ヴィスキルヒェンはこれらの事実になんらかの意図をもって目をつむるのである。かれの研究はナフタ像の解明に新たな視座を拓くものである。しかしながらマンと<保守革命>との関係を故意に黙殺するかぎり，<中世的コミュニズム>の背後にある思想的広がりを精確に捉えることはできないだろうし，それをしないかぎり，ヴィスキルヒェンが描いてみせるナフタ像も歪んだものにならざるをえないだろう。ヴィスキルヒェンの論考は，『第三帝国』の著者メラーをマンとの関係で否定的文脈においてのみ捉えようとする典型的な例ということができる。

1920年前後のマンは当時の保守的思想潮流，そのなかでもとくにメラーによって代表される<保守革命>とヴェクトルを共有していた。それゆえマンが敗戦と同時におこなった新たなドイツの摸索過程も，<保守革命>と思想的にパラレルなかたちでなされたという一面を本質的に持つと考えることができる。――このことはマンが，<転向>以前のドイツ像がもっとも明確に提示されて

いるといってもいい1921年版の『ゲーテとトルストイ』を，ほかならぬ＜6月クラブ＞の主要メンバーのひとりルードルフ・ペッヒェルが編集し，メラーもたびたび寄稿していた『ドイチェ　ルントシャウ』に掲載したことからも明らかだろう。――したがってメラーの思想とつき合わせることによってはじめて，これまで見過ごされがちであったマンの保守主義の一断面が浮かびあがってくるのである。いいかえるなら，マンと＜保守革命＞的思想との親縁性を確認することによってはじめて，マンの保守主義の内実を解明する，さらにはかれの思想的位置を定位する前提条件のひとつが満たされるのである。

Ⅳ

1920年前後のマンはメラーを中心とする＜青年保守派＞との政治的・思想的親縁性を示しつつ，西欧にたいするアンチテーゼとしてのドイツを，つまりデモクラシー，リベラリズムを超克する独自の社会主義にもとづくドイツを摸索していた。そのマンが1922年6月のラーテナウ暗殺を決定的な契機として，[119] 同年10月におこなわれた講演『ドイツ共和国について』のなかで，ドイツ国民，とくにドイツの若者たちに向かって共和国，とはすなわちヴァイマル・デモクラシー支持を訴えたのであった。これは政治的に見るなら明らかに反デモクラシーからデモクラシー支持への＜転向＞であり，メラーグループからの訣別を意味している。[120] しかしマンと＜保守革命＞との関係もそれでおわってしまったのだろうか。ヴァイマル・デモクラシーにシフトすることを決意したとき，マンはおのれ自身の問題としてこの＜保守革命＞にどのように対処したのだろうか。

『ドイツ共和国について』においてマンは，「世俗的であると同時に超俗的」でもある「第三のもの」を「ドイツ的まんなか」，「フマニテートの要素」と捉える（XI. 830f.）。さらにかれはホイットマンを引用しつつ「肉体とたましい」のジンテーゼを「宗教的フマニテートの第三帝国」と名づけ（XI. 847），「真にドイツ的なまんなか」である「フマニテート」を，「耽美主義的な個別化と，一

般的なもののなかで個人が品位をなくして没落することとの，神秘と倫理，内面性と国家性との，倫理的なもの，市民的なもの，価値を死と結び合って否定することと，無色透明で倫理的な理性の俗物根性以外のなにものでもないもの」との「あいだ」に措定したうえで，その「法的形式の意味と目標」を「政治的生活と国民的生活の合一」とする (XI. 852)。このような論法にかんしてスターンは，マンが諸対立の「あいだ」に措定した「ドイツ的まんなか」，「フマニテート」を明確に「第三帝国」と呼び，『ドイツ共和国について』のマンとメラーのジンテーゼ＝「第三帝国」志向との一致を確認しつつ，「だがメラーは，同じような対立は第三帝国では和解可能であると考えたのに対し，マンは「共和国万歳」と，共和国への敬意を示して，講演を終えたのである」[121]という。スターンは『ドイツ共和国について』に見られるマンの「まんなか」—ジンテーゼ志向とメラーのそれとの一致はみとめているのだが，しかしメラーが「第三帝国」において対立が解消されうると考えたのにたいして，マンのほうは「共和国ばんざい」を唱えたというのはどういうことだろうか。マン自身も，かれの「第三帝国」において対立の解消が，「まんなか」としての「フマニテート」が実現されると考えていたのではないだろうか。

クルツケはうえにあげた『ドイツ共和国について』の最終部分を例にとって，マンのまんなか—ジンテーゼ志向が「保守革命」，とくに『第三帝国』におけるメラーの主張と共通のものであることを指摘している。[122] スターンとクルツケは思想そのものに内在する本質的特性という点でマンとメラーに共通性がみとめられることを指摘しているのだが，しかし，ヴァイマル・デモクラシー支持を表明したマンと1925年の死にいたるまで反リベラリズム，反デモクラシーの立場を貫き通したメラーとでは，その政治的立場がまったく異なる。少なくとも1921年のおわりごろまで両者は政治的にも同方向のヴェクトルを共有していた。それが1922年のある時点から，まんなか—ジンテーゼ志向という特質は共通のまま，ふたりのヴェクトルは完全に逆方向を向いてしまう。あるいは問題をマンに引きつけていうならば，共和国を支持するマンはメラーとおなじ基盤に立ったまま，その思想をメラーとは政治的に正反対の目的に使おう

とするのである。ここにマンの＜転向＞をめぐる問題の複雑かつ微妙な点があるといってしまえばそれまでであるが，しかし＜保守革命＞とマンとの関係を考えるさい，われわれはこの事実をどう解釈すればいいのだろうか。

もう一度整理するならば，マンは保守主義的伝統と，戦後かれが摸索しつつ志向した立場，メラー的＜保守革命＞と通底するまんなか―ジンテーゼを求める立場に立ったまま，ヴァイマル・デモクラシーにコミットした，というよりもそれを擁護するために ＜保守革命＞ の理念を積極的に利用しようとさえしたのである。＜青年保守派＞は「東と 西に 同様に向けられた第三の道」を目指していたとレンクはいう。[123] このことばを マンにあてはめて みる ならかれは，「現実」のうちにこの「第三の道」を 見出したとはいえないだろうか。すなわちマンは，自分がこれまで取ってきた立場が「現実」を擁護するうえでも有効であることをみとめた，いやむしろ，これまでの立場によって「現実」が擁護されうるものであるということを，つまり「現実」が真の意味で「第三の道」としての 有効性を 有するということを 見出したがゆえに，「現実」＝共和国支持を決意したと考えられるのである。したがってマンの＜転向＞は，おのれが求める ドイツ像，＜1914年の理念＞に動機づけられたドイツ像，「まんなか」として諸対立の解消を可能にする「第三帝国」を，保守的思想潮流に身を置いたまま現実の共和国のうえに具現してゆこうとする試みであったということができる。「もしかすると意見は変えたかもしれないが，しかし 志操は変わっていない」（XI. 809）というのちに『ドイツ共和国について』に附された序文のことばも，また共和国の誕生を1918年ではなく1914年 8 月とするかれの態度も（XI. 811, 824），このような意味において解釈することができるように思える。

マンと＜保守革命＞とのふかいつながりをみとめるクルツケは，マンの共和国支持のありようを，かれが＜保守革命＞を「脱政治化」した結果であると示唆している。[124] うえに 見たように『ドイツ共和国 について』のマンは，がんらい政治的には反デモクラシー的・反共和国的なものであった＜保守革命＞の理念を共和国のうえに根づかせ展開させようとし，つまりた，マンは＜保守革

命>が持つ反デモクラシー的ヴェクトルをヴァイマル・デモクラシーに向けて転換させたのであった。たしかにマンの共和国支持はメラーからの訣別を意味している。しかしそれは，ふたりが共有していた思想をマンが全面的に放棄した結果おこなわれたものでもなければ，その思想を「脱政治化」した結果でもなかったのである。マンの<転向>は，「まんなか」—ジンテーゼ—「第三帝国」という<保守革命>の理念を保持しつつ，それが持つ政治的ヴェクトルを 180 度転換させたもの，すなわち<保守革命>思想の政治的位相転換という性格を根底において持つものだったのである。ヴァイマル初期におけるマンと<6月クラブ> との思想的親縁性を鋭く指摘している脇圭平は，この時期のマンを「右翼に足をとられかけた」と評している。[125] しかしわれわれの考察にしたがうならば，マンはけっして<保守革命>に「足をとられかけた」のではなかろう。マンは <保守革命> の理念を捨て去ることはなかったのである。[126] かれの<転向>は，クルツケのいうようにマンにとって「政治的ふるさと」となりえたかもしれないこの <保守革命> 的思想を，[127] ヴァイマル・デモクラシーに架橋しようとする試みであったといってもあながち誇張とはいいきれないだろう。

マンは『考察』において政治的生活と国民的・精神的生活の分離というテーゼを立て，非政治的なドイツ文化にもとづくドイツ性が政治化されることを阻止すべく全力をつくした。そして第一次大戦後かれが求めたドイツは，そのようなドイツ性を保持しうるものとしての新たなドイツであった。しかしいかにマンがその非政治性を主張しようとも，時代によって「召集」された (XII. 9) 『考察』のような書物のなかでドイツ性について論じることじたいある程度「政治的」な行為なのであり，まして戦後の状況下においてはこのドイツ性が政治化するのを避けることは不可能だろう。たとえば1921年版『ゲーテとトルストイ』の末尾にマンが提示した「文化としてのドイツ」は，なるほどまったくもって非政治的なことばで語られてはいるが，本稿第2章で見たようにそれが語られる文脈をとおして浮かびあがってくる姿はきわめて政治的なものであった。1920年前後の状況下で，とくにマンのように新たなドイツ像を摸索する

ばあい，政治と文化を分離するなどというのはもはや不可能なことなのであって，この両者はむしろ加速度的にまざり合ってゆかざるをえないのである。すると，文化と政治を分離しようとするマンの意図は，不可避的にまざり合うふたつの領域をかれの内部で分裂させるという結果をもたらし，これが，当時かれが陥っていた深刻な危機のひとつとなっていたとはいえないだろうか。そうだとするなら，政治的な＜保守革命＞とパラレルなかたちでおこなわれた1920年前後のマンの歩みは，おのれの内部にあるこの分裂を，それが意識的になされたかどうかはべつとして，克服しようとする試み，「たましい」と「精神」あるいは「保守主義」と「革命」とも置きかえられる文化と政治のジンテーゼ，これをもたらしてくれるユートピア＝「第三帝国」を目指しての摸索過程という側面をも持っていたのであり，「政治的生活と国民的生活の合一」というテーゼが掲げられる『ドイツ共和国について』においてこの摸索過程が終結点をむかえたと考えることもできるだろう。

11月革命から共和国支持にいたるあいだ，マンは特定の党派あるいはグループにくみすることを慎重に避けていた。同時にこのことと根本において結び合っているのだが，思想的な面においてもメラーやシュペングラーにのみ共鳴していたのではなく，本質的にヨーロッパ的な作家として，かれらよりも「左」のクルツィウス等とも意見交換をおこなっており，また『魔の山』執筆にともなうゲーテ受容，さらにはニーチェに倣ったロマン主義の自己克服などマン自身の自己発展もこの時期のかれの思想を考えるばあい重要な要素として存在している。したがって本稿のような考察方法は，さまざまにもつれ合っている思想の糸を一本だけ引き抜き，そのうえさらにそれを拡大鏡で見ているのだといわれてもしかたのないものである。しかしながらメラー・ファン・デン・ブルックとのかかわりという観点からわれわれがここに引き出し拡大した糸，これまで故意に黙殺されるか，「それはマンにとって解決ずみだ」のひとことで片づけられてしまうことがあまりに多かったこの糸は，マンの保守主義の内実を明らかにする手掛かりを，さらに＜転向＞にかんして新たな角度から照明をあてる可能性を与えてくれる一本の糸だったのである。あるいはその後のマンとの

かかわりという点から考えるなら，かれにとって「政治的ふるさと」たりえたこの<保守革命>が，経済恐慌以降ふたたびその姿をあらわし，最終的にナチズムというもっとも醜悪でグロテスクなものになだれ込んでいったという事実は，マンが『ファウストゥス博士』を書いた，いや書かざるをえなかった要因のひとつとなっているのではないだろうか。

マンとメラー・ファン・デン・ブルックおよび<保守革命>との関係にわれわれは目をつむるべきではないだろう。それは，マンの全体像を把握するためにも今後さらに検討を加えてゆかねばならない問題だろう。

註

本稿で使用したトーマス・マンのテクストはつぎのとおりである。

Thomas Mann : Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Frankfurt/M. 1974.
（本文中括弧内のローマ数字は巻数，アラビア数字はページ数を示す。）

„Goethe und Tolstoi"—Vortrag zum ersten Mal gehalten September 1921 anläßlich der Nordischen Woche zu Lübeck—In : Deutsche Rundschau Jg. 48, H. 6, März 1922. S. 225-246. (D/R と略記)

Thomas Mann Tagebücher 1918-1921. Hrsg. von Peter de Mendelssohn, Frankfurt /M. 1979. (Tb と略記)

Thomas Mann Briefe l 1889-1936. Hrsg. von Erika Mann, Frankfurt/M. 1961. (Br-l と略記)

Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910-1955. Hrsg. von lnge Jens, Pfullingen 1960. (Br-B と略記)

Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register Band l 1889-1933. Hrsg. von Hans Bürgin u. Hans-Otto Mayer, Frankfurt/M. 1976. (R-l と略記)

1）マン同様1914年8月の熱狂にあずかった当時の代表的知識人としては，たとえばエルンスト・トレルチやフリードリヒ・マイネッケの名をあげることができる。E・トレルチ『1914年の思想』（西村貞二訳『ドイツ精神と西欧』筑摩叢書1970年，33頁以下），F・マイネッケ『ドイツの悲劇』（矢田俊隆訳『世界の名著54　マイネッケ』454頁）参照。むろん熱狂した者たちばかりではなかった。ヴァルター・ベンヤミンなどはこのような高揚をまえにして「下劣」なという断を下したらしい。野村修『ベンヤミンの生涯』（平凡社1977年）44頁。

2）これは当時の知識人たちがおのれの熱狂から抽出した理念ということができる。

<1914年の理念>については，A・H・コクターネク，南原実，加藤泰義訳『シュペングラー――ドイツ精神の光と闇――』(新潮社，原書1968年刊) 139頁以下，F・スターン，中道寿一訳『文化的絶望の政治　ゲルマン的イデオロギーの台頭に関する研究』(三嶺書房，原書1961年刊) 275頁参照。

3) Eckhard Heftrich : Vom Verfall zur Apokalypse. Über Thomas Mann. Frankfurt/M. 1982. S. 143ff.

4) Tb. S. 73f.

5) 戦争がブルジョワ時代をおわらせたという認識は日記の随所に読み取ることができる。たとえば1918年12月26日の日記 (Tb. S. 116) 等。

6) Tb. S. 77.

7) 1918年11月28日の日記。Tb. S. 96f.

8) ebd. S. 610.

9) ebd. S. 98.

10) ebd. S. 100.

11) 1918年11月13日 (Tb. S. 76) あるいは1919年1月11日 (Tb. S. 132) の日記参照。

12) Vgl. XII. S. 111 u. a.

13) Tb. S. 176. またフリートレンダーの影響については，1919年3月28日付のフリートレンダー宛書簡 (R-l. S. 263) 参照。

14) Tb. S. 178.

15) ebd. S. 196.

16) ebd. S. 222.

17) ebd. S. 222f.

18) Hans Wisskirchen : Zeitgeschichte im Roman. Zu Thomas Manns 〉Zauberberg〈 und 〉Doktor Faustus〈. Bern, 1986. S. 46ff.

19) Tb. S. 200.

20) Vgl. ebd. S. 240.

21) Vgl. ebd. S. 348.

22) 1919年6月13日付パウル・エルツバッハー宛書簡のなかのことば。R-l. S. 268.

23) Tb. S. 263.

24) 1920年3月16日付エルンスト・ベルトラム宛書簡 (Br-B. S. 88) 参照。

25) Vgl. Tb. S. 359, 370f.

26) ebd. S. 353.

27) ebd. S. 369.

28) D/R S. 243.

29) たとえば1920年8月8日の日記にはロシアと結ぶことの必要性について記されている。Tb. S. 458.

30) ebd. S. 94.

31) J・F・ノイロール，山崎章甫，村田宇兵衛訳『第三帝国の神話　ナチズムの精神史』(未来社，原書1957年刊) 139頁参照。

32) Vgl. Kurt Lenk : Deutscher Konservatismus. Frankfurt/M. 1989. S. 141f.

33) Br-l. S. 183.

34) たとえば XII. S. 31.

35) あくまでマンが主張するインターナショナリズムでありコスモポリタニズム。一般には両者はマンの理解とは逆に考えられるばあいが多い。

36) K・ゾントハイマー，河島幸夫，脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想』(ミネルヴァ書房，原書1968年刊) 286頁。またシュペングラーは社会主義を「スローガン中のスローガン」と呼んでいる。Oswald Spengler : Preussentum und Sozialismus. München, 1922. S. 3.

37) Graf Hermann Keyserling : Deutschlands wahre politische Mission. Darmstadt, 1921. (dritte Auflage) S. 34.

38) ebd. S. 42ff.

39) コクターネク，前掲書，168頁。

40) Br-l. S. 173.

41) D/R S. 245.

42) ebd. S. 245f.

43) Volkmar Hansen, Gert Heine (Hrsg.) : Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann. 1909-1955. Hamburg, 1983. S. 50.

44) Vgl. Ernst Robert Curtius : Deutsch-französische Kulturprobleme. In : Der Neue Merkur. 5. Jg. April 1921—März 1922. S. 147.

45) Alfons Paquet : Rhein und Donau. In : Die Neue Rundschau. 32. Jg. H. 3 (März) 1921. S. 235.

46) D/R S. 246.

47) ebd. S. 246.

48) 1922年1月10日のインタヴューのことば (註43) からも明らか。また，ドイツが東を向いているという当時のマンの認識にかんしては，『ドイツ—フランス関係の問題』(XII. 613f. u. 616f.) 参照。

49) Hermann Kurzke : Thomas Mann : Epoche-Werke-Wirkung. München, 1985 S. 175ff.

50) このような研究の例としては，Anthony Grenville : "Linke Leute von rechts" : Thomas Mann's Naphta and the Ideological Confluence of Radical Right and Radical Left in the Early Years of the Weimar Republic. In : DVJS. 4/1985. S. 651-675.

51) 蔭山宏『ワイマール文化とファシズム』(みすず書房, 1986年) 3頁。
52) たとえば Lenk, a. a. O. S. 110.
53) 蔭山, 前掲書, 145頁以下。
54) Lenk, a. a. O. S. 112.
55) Armin Mohler : Die Konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Dritte, um einen Ergänzungsband erweiterte Auflage. Darmstadt, 1989. (Erste Auflage, 1950) S. 114f.
56) ebd. S. 67f. u. 127.
57) Tb. S. 34.
58) ebd. S. 391.
59) スターン, 前掲書, 306頁参照。
60) Tb. S. 419.
61) ゾントハイマーによるとこの時期のマンは『良心』を, かれと政治について話をするだれもに,「他に類を見ない最高のドイツの新聞」であるとして推賞していたということである。Kurt Sontheimer : Thomas Mann und die Deutschen. München, 1961. S. 56.
62) Tb. S. 486.
63) ebd. S. 367, 368.
64) R-I. S. 292. またゾントハイマーの報告によるならマンは『リング』にたいして,「あなたがたのグループの政治的, 文化的な態度は直接わたしの精神的な神経を, それとともにじっさい肉体的な神経をも慰めてくれます。あなたがたの世界に触れるといつも精神的共感をおぼえます」と書き送ったということである。
Sontheimer, a. a. O. S. 56.
65) 円子修平 『ふたつの第三帝国』ドイツ文学第24号 (1960年) 9頁。
66) N・コーン, 江河徹訳『千年王国の追求』(紀伊国屋書店, 原書1957年刊) 104頁以下。
67) Kurzke, a. a. O. S. 175.
68) Tb. S. 200f.
69) スターン, 前掲書, 260頁参照。
70) 同上, 274頁以下参照。
71) コクターネク, 前掲書, 131頁。
72) スターン, 前掲書, 254頁。
73) Vgl. Lenk, a. a. O. S. 158.
74) Arthur Moeller van den Bruck : Das dritte Reich. Zweite Auflage. Berlin, 1926. (1. Auflage 1923) S. 34f.
75) ebd. S. 94.

76) Lenk, a. a. O. S. 109.
77) Mohler, a. a. O. S. 139.
78) Moeller, a. a. O. S. 35.
79) ebd. S. 331.
80) ebd. S. 331.
81) Moeller : Die Auseinandersetzung mit Spengler. In : Hans Schwarz (Hrsg.) : Moeller van den Bruck : Das Recht der jungen Völker. Sammlung politischer Aufsätze. Berlin, 1932. S. 34f.
82) ebd. S. 35.
83) Moeller : Das dritte Reich, a. a. O. S. 19.
84) ebd. S. 43.
85) ebd. S. 45.
86) ebd. S. 45.
87) ebd. S. 44.
88) ebd. S. 44.
89) ebd. S. 92.
90) ebd. S. 92.
91) ebd. S. 96.
92) Lenk, a. a. O. S. 140.
93) Vgl. Moeller : Das dritte Reich, a. a. O. S. 42 u. 94.
94) Vgl. ebd. S. 54ff. u. a.
95) ebd. S. 49.
96) Moeller : Rußland. In : Das Recht der jungen Völker, a. a. O. S. 65.
97) ebd. S. 67.
98) Moeller : Das dritte Reich, a. a. O. S. 96.
99) ebd. S. 13.
100) ebd. S. 14.
101) ebd. S. 14.
102) ゾントハイマー，前掲書，247頁。
103) スターン，前掲書，332頁。
104) Moeller : Das dritte Reich, a. a. O. S. 13.
105) ebd. S. 12.
106) スターンもいうように，対立を止揚する数字「三」というのはメラー独自の考えではなく，「ほとんどのドイツ近代思想に認められる」（スターン，前掲書，332頁）ものである。たとえばメラーとはなんの関係も持たないE・R・クルツィウスなどもこの時期，1921年7月24日付のアンドレ・ジッド宛書簡のなかで，「ヘーゲル的な意味

で」対立を「超克」する「第三の書」という発言をおこなっている。H/J・M・ディークマン編，円子千代訳『クルティウス＝ジッド往復書簡』（法制大学出版局，原書1980年刊）38頁。

107）Mohler, a. a. O. S. 24.

108）これは「三」という数字同様マンやメラーにのみ固有のものではない。たとえばルードルフ・パンヴィッツは1920年，ドイツは地理的にも精神的にも「まんなかに位置する」という発言をおこなっている。Rudolf Pannwitz : Die Bedeutung des deutschen Geistes für die europäische Kultur. In : Der Neue Merkur, 3. Jg. 1919-1920. S. 553. このようなまんなかに位置するドイツ—「中央ヨーロッパ思想」は，第一次大戦中，とくにフリードリヒ・ナウマンが1915年に主張して以来，広汎に広まったものである。Vgl. Lenk, a. a. O. S. 142.

109）マンについては，さきにあげたクルツケの推論（Kurzke, a. a. O. S. 175）を，メラーにかんしてはスターン，前掲書，405頁参照。

110）Moeller : Das dritte Reich, a. a. O. S. 13 u. a.

111）ebd. S. 305ff.

112）一例として，マンがM・ヴュルツバッハ，ベルトラム等とともに1920年ごろ，全ヨーロッパ的なものとして設立しようとしていた「ニーチェ協会」をあげることができる。この協会がじっさいに設立されたのは1924年。Vgl. Tb. S. 470,『クルティウス＝ジッド往復書簡』，前掲書60頁以下。

113）1921年7月12日付ジッド宛書簡のことば。同上32頁。

114）Wisskirchen, a. a. O. S. 54f.

115）ebd. S. 81.

116）ebd. S. 80f.

117）ebd. S. 78.

118）ebd. S. 79f.

119）ラーテナウ暗殺はあくまできっかけにすぎない。共和国支持の方向は1922年3月の講演『告白と教育』のなかですでに打ち出されていたと考えられる。たとえばマンはそのなかで，これまで蛇蝎のごとく嫌っていた<政治>にコミットする姿勢を示しつつ，『ドイツ共和国について』の中心的な理念のひとつをなす，「自伝的自己形成者気質の理念から生じる教育の理念とともに，社会的なものの領域が達成されるということ，そして，人は社会的なものに触発されて，人間的なものの疑いなく最高の段階，つまり国家をみとめるのだということ，それが，『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のなかにこのうえなく美しい仕方であらわされているのです」という発言をおこなっている（XIII. 255）。

120）たとえば<青年保守派>はマンの共和国支持表明にいちはやく反応して，講演『ドイツ共和国について』からわずか八日後の1922年10月23日，『良心』にオットー・

ヴェルナーの『船から落ちたマン』という論評を掲載し，「戦時中のナショナルでドイツ的な信条告白から，いまなおヴェルサイユという名をおわされている平和時におけるデモクラシー的・人道主義的な信条告白への転換」を非難している。Otto Werner : Mann über Bord. Zu Thomas Mann's Vortrag : Von deutscher Republik. Das Gewissen, 23. Oktober 1922. In : Klaus Schröter (Hrsg.) Thomas Mann im Urteil seiner Zeit. Dokumente 1891–1955. Hamburg, 1969. S. 103ff.

121) スターン，前掲書，348頁。

122) Hermann Kurzke : Auf der Suche nach der verlorenen Irrationalität. Thomas Mann und der Konservatismus. Würzburg, 1980. S. 99f.

123) Lenk, a. a. O. S. 142.

124) Kurzke : Auf der Suche nach der verlorenen Irrationalität, a. a. O. S. 145.

125) 脇圭平『知識人と政治——ドイツ・1914〜1933——』(岩波新書，1973年) 126頁以下。

126) 亡命後もマンは「保守革命」に言及している。1937年に出された『尺度と価値』第一巻への序文においてかれは，「芸術家気質」を「その本質からして保守革命」であると位置づけ，「わたしたちがふかくこころにかけているのは，歪曲と堕落からこの概念を再興すること」，すなわち「過去のものに憧れるのではなく，尺度を新しくつくり出し，今日の諸条件のなかからあらためて獲得し設定する」ことであると述べている (XII. 801f.)。「保守革命」についての発言は，1920年前後のものとくらべるならたしかにある程度はクルツケのいうように「脱政治化」されているかもしれない。しかしこれがほかならぬ『尺度と価値』第一巻の序文における発言であるという事実，また「保守革命」を「歪曲と堕落」，すなわちナチズムの手から取り戻さねばならないということばから考えて，マンが「保守革命」を政治から切り離し，純粋に芸術的な領域に逃避させようとしているのではないことは明らかだろう。

127) Kurzke : Auf der Suche nach der verlorenen Irrationalität, a. a. O. S. 145.

追記

脱稿後に入手した文献のなかでH・レーネルトは，1921年版『ゲーテとトルストイ』とのかかわりという観点から，マンと<保守革命>との関係，とくに両者の思想的共通点ならびに相違点について考察している。クルツケ同様，ナチズムという巨大な負のエネルギーからいったん身を切り離したうえで<保守革命>とのかかわりを冷静に分析するという立場に立ってなされたものであるが，なにぶん原稿を印刷にまわしたのちのことなので，本稿と内容的にある程度共通する面を持つこの論考に批判的検討を加えることができなかった。ここにことわっておきたい。

Herbert Lehnert und Eva Wessell : Nihilismus der Menschenfreundlichkeit. Thomas Manns „Wandlung“ und sein Essay Goethe und Tolstoi. Frankfurt/M. 1991. (Thomas-Mann-Studien ; Bd. 9) S. 61ff.

正　誤　表

フマニタス　第17号

＜非政治的人間＞の政治遍歴……友田　和秀

上記論文中に誤りがありましたのでお詫び旁々訂正いたします。

51頁最下行

（誤）　展開させようとし，つまりた，マンは

↓

（正）　展開させようとした，つまり，マンは